The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜文献紹介＞ジョヴァンニ・マテウッチ著『ディルタイ　関係としての美』Giovanni Matteucci : Dilthey, Das Ästhetische als Relation, Königshausen & Neumann, 2004.
Author(s)	入江, 祐加
Citation	メタフュシカ. 2015, 46, p. 85-91
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/54527
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

《文献紹介》
ジョヴァンニ・マテウッチ著
『ディルタイ　関係としての美』
Giovanni Matteucci: *Dilthey, Das Ästhetische als Relation,* Königshausen & Neumann, 2004.

入江祐加

序

本書は、ボローニャ大学で著者が取り組んだ十数年間のディルタイ研究の成果をもとに執筆された。著者のマテウッチは 1993 年に美学（Estetica）で Ph.D. を取得し、ボローニャ大学の教授として哲学、人間学、倫理学、美学に関する論文を多く残している。本書の全体は 136 頁であり、イタリア語で書かれたものであったが Markus Ophälders が翻訳した。

本書は美を「反省（Reflexion）」から産み出されたものと捉え、ディルタイの心理学の分析に多くの頁が割かれている。一方で著者はディルタイの心理学を「人間学」と考える（Psycho-Anthropologie）。美の普遍的な価値を捉えようとする本書の論点は、心理学と美学の反省の対象がともに個人ではないという点にある。著者はディルタイ心理学の分析を通して自己と他者の関係を捉え直し、自己と他者の関係を分析することによって芸術作品における他者の存在に必然的意味を授ける。芸術家の主観的意識から生まれる美はいかにして芸術家以外の人間に伝達され、概念化されるのだろうか。一般的なディルタイ研究としての成果だけでなく、心理学と結びついた美学論としても意義深い。また、美の考察を個人の感覚や経験にとどまらず、世界や人間を説明するものとして拡大している点は芸術作品の存在価値を高めることにも貢献している。

1．著者の問題圏

本書は「序言」、「序論」、「問い」、「課題」、「解決法」からなる。各論はそれぞれ数節に分かれている。

序言

序論：美の遷移性と関係性

I. 問い

ディルタイの思想における美学的問題の定立

II. 課題

体験の関係性

世界の形態としての自己の構造：美学と心理学的人間学

III. 解決法

形式の力動性に含まれるもの

詩作の理念

解釈学的誤解から離れて

表題から分かるように、本書は「序論」と「I. 問い」で著者の問題が設定され、「II. 課題」でディルタイの思想の主要な論点が分析されている。ディルタイの長年の取り組みが著者の問題と結びついたうえで「III. 解決法」に入り、「序論」と「I. 問い」で述べられた著者の問題の解決法が考察される。マテウッチの分析はディルタイ中期の心理学論、美学論にとどまらず、後期の歴史論や世界観学にまで及んでいる。広範囲にわたるディルタイの研究成果から美学の問題を考察している点が特徴である。

「序論」では、ヘーゲルやガダマーの美学論の引用とともに著者自身の問題が詳しく述べられる。マテウッチによると、美はそれ自体で意味や価値をもつことはない。それは「中立的な容器（ein neutraler Behälter）」（S.9）である。美の意味は美の次元から完全に独立しているものによって与えられる。それゆえに美に意味や価値を与えるためには、美それ自体のなかにはない「理論的な表象（jene theoretischen Vorstellungen）」（S.9）が美と結びつくことが必要になる。著者は美と知性の関係、すなわちアイステーシスとノエシスの関係の分析を本書の問題として設定する（Vgl.S.9）。知性と概念は、作品に内在しないノエティッシュな真理を美に付与する。しかしその意味的関与は排他的な方法でなされるわけではない。著者によると、単線的な方法で美が他のものに遷移することはない。美がいかなる考え方で「transive（遷移的）」（S.9f.）であるかが本書の問題の論点になる。

transive という形容詞は肯定的に使われない場合もある。著者はその例としてヘーゲルの美学をあげる（S.10-13）。ヘーゲルの美において、transive という形容詞は真理に向かって上昇していく運動として捉えられる。彼は美の地平を真理に従属させる。ヘーゲルは美（Schönheit）と真理（Wahrheit）を同一化するが、彼において美は観念であり、人間とかかわることは前提とされていない。

しかし美の遷移性は固定された観念に向かうのではなく、複数の観点から絶え間なく議論することによってひとつの「蓋然性（Wahrscheinlichkeit）」を開示するべきである（S.15f.）。著者は序論において芸術作品という「物質的な存在（das *esse*（einer Substanz））」を、「意味を受け持つものの不確かな地平の作用（das *efficere*（von problematischen Horizonten der Sinnhaftigkeit））」（S.22）におきかえることを提示する。

２．心理学と美学における主観―客観

「I. 問い」では、ディルタイの思想の分析に入り、著者はまず「歴史的理性批判」を美学の問題と関係づける（S.25-27）。ディルタイは自らの試みを「生を生そのものから理解する」と述べ、精神科学において人間が考察の主体でありかつ客体である二重性を構造として取り出した（Vgl. S.27）。しかし体験を思考で捉えようとするならば、その生々しさは破壊され中身のない体系となる。そこで美学という分野で人間の経験におけるさまざまな様態の実践を問うことが必要となる。

著者は心理学の主観―客観関係を美学の問題と関係づける。心理学と美学の研究では、イメージの作り手と共有者の存在がともに主題となる。他者に自分の気持ちを表現するときには、内部と外部、すなわち心的状態と作品という二つの側面が統合されている。自己の内部で行っている反省は同時に自己の外へ向かう反省でもある。自己のなかで生産された作品は、つねにそれを観るものとともにある。生産するものの反省と観るものの反省がともに美学的反省と呼ばれなければならない。主観―客観についての捉え直しが、芸術作品とそれを受け取る他者との関係を再構築する。

意識の素材は、知覚の表象のみから外的世界と本質的な関係をもつのではない。他のものに対する不変の相互作用や自分を何かに置き換えることのなかで主観の本性は伝達される（Vgl.37）。「消すこと（Ausschaltung）」、「強めること（Intensivierung）」、「補強すること（Ergänzung）」という三つの方法によって、芸術家の自己は美的世界を創造する。美学の命題は、芸術家の心的状態と強くかかわっている。たとえば絵画制作において芸術家は、筆や絵の具を使い画面を補強することによって自身の内面世界と外的世界とを統合させる。またすべての詩は作者の感情のなかで人生観が描写される。美学が心理学と関係する理由を著者は以下のように述べる。

> 心理学の対象と美学によって探求される事態は、すべて意識の領野のなかで生じる。意識の領野の二つの側面（内部と外部、心的状態と絵の全体）はその表象の前後関係の構造的―関係的な存続によって統合される。（S.37, 下線は入江）

著者はここで、なぜ「統合される（integriert werden）」という言葉を用いるのか。それは逆に考えると、心理学と美学によって探求される事態が、つねに自己の内面世界とその理解を試みる他者という二つの側面に分断されていることを示している。創造者はつねに創造において自己を反省し、それを世界全体の表象に広げていく。しかし現実には主観と客観は完全に同一にはなりえない。創造者と観察者の間に分裂があることが、作品を不可解にすると同時に魅力的にしている。著者はあえてその一致を主張することで、美が他のものに理解されていく事実に必然性を与えようとしている。美学において主観と客観の統合の道筋を示すことは、「人間自身や、また人間によって作られた社会や歴史を認識する人間の能力の批判」（GS I, S.116）、すなわちディルタイの「歴史的理性批判」の試みそのものに根拠を与えることにつながる。なぜ絵画や詩の要素は統合される必要があるのだろうか。著者は、芸術作品を個人の技能の卓越による産物ではなく、人間相互の関係性が始まる契機だと捉えている。

３．表現の再帰性

「II. 課題」でも引き続き、ディルタイの思想が述べられる。

著者は、「序論」で問題設定したアイステーシスとノエシスの関係を明らかにするために、ディルタイ哲学の核心である生の構造分析を美学の思想と結びつける（S.59-63）。「知」は、ヘーゲル的な絶対知でもなければカント的なアプリオリな認識でもない。カントは認識を囲ったが、ディルタイは認識を開く。認識は個人の内的経験に根ざしているが、世界全体を表象することにも向かう。自己の内的状態は、つねに外界に向けられている。ディルタイの有名な「表現（Ausdruck）」という言葉が改めて考察されなければならない。「体験（Erlebnis）」は「表現（Ausdruck）」されることにおいて「理解（Verstehen）」を可能にする。

生はディルタイにとって「私たちが体験する（erleben wir）」ことであって、私たちにとってひとつの謎である。生は謎のままであるが、人間はそのなかに現われ（Auftreten）、それを描写する（Darstellen）（S.66）。著者は、Auftreten と Darstellen を「見ること（Sehen）」と関係づける。Auftreten と Darstellen は画家自身の描写し上演する行為と関係する。つまりその二つの言葉は「再帰的（reflexiv）」に使用されており、自己を見せ、自己を展示する行為（den Akt des sich zur Schau Stellens, des sich Ausstellens）（S.67）を示している。著者によると、人に見せるために描写すること（Darstellen）は特別な行為である。それは、自己を見せ（des sich zur Schau Stellens）、自己を特徴化し（des sich Profilierens）、形式を授ける行為である。「再帰的（reflexiv）」という言葉にもあるように、マテウッチは「表現」を他者に対する遷移として捉えているとともに自己から取り出され、自己に戻ってくるものとも捉えている。「表現（Ausdruck）」は他者に開かれていく行為のなかで、自己の内面を自己に意識化させる。

しかしここで目指されているのは sich の可視化である。先ほどの「私たちが体験する（erleben wir）」という言葉に登場する「われわれ（wir）」はそれにどう関わってくるのか。後で述べられる「心理学的人間学（Psycho-Anthropologie）」と合わせて考えると、著者は芸術の営みを個人の再帰として捉えてはいない。自己を描写し、他者に展示することのなかで、その自己が自己の前に客観的に現われる。しかしその自己理解は現前の対象を超えて人間そのものの自己理解を問わなければならない。ここで述べられている sich という言葉には多義性がある。著者はディルタイの言葉を以下のように引用する（S.77）。

> ……個人はしたがって、利己性の概念が自己のなかで捉えるこの孤立した個人的な存在ではなく、個人はむしろ他の個人や社会、またむろん自然の生の感情を自己のなかで含みもっている複合体である。（GS.XVIII.S.177）

美の普遍化を目指す本書の論点は、「個人（Individuum）」という語の意味を再構築することにある。これは同時に「心理学（Psychologie）」の定義を構築し直すことにつながる。

４．「心理学的人間学（Psycho-Anthropologie）」

なぜ、ディルタイは一人の個人を問うだけでは満足しなかったのか。著者は、ディルタイの友人であったヨルク（Graf Hans Ludwig Paul Yorck von Wartenburg）とディルタイとの関係を分析する（S.86-87.）。ヨルクはディルタイと親しい間柄で、往復書簡などの交流を重ねていた。ディルタイとヨルクはともに歴史性（Geschichtlichkeit）を存在論（Ontologie）から定義づけた最初の哲学者である。ヨルクは存在と歴史の間にある種的な相違を強調した。ヨルクは観察されたものの原初的な本性を考察することを試み、歴史の生動性を叙述し、歴史の変動の中に没頭することを目指した。しかしディルタイと違って、ヨルクには「他者」がいなかったと著者は述べる。ヨルクの思想は、自己の体験の内部で認識が完結するだけであったが、ディルタイは反省の意味を拡大させ、学にまで結びつけた。「反省」の意味の拡大化は、自己についての考察を社会と歴史に向けさせる。主観的なもの以外のものを認識することの意義を著者は強調する。

以上の考察から、著者は新しい概念を提示する。それは「心理学的人間学（Psycho-Anthropologie）」という概念である。ディルタイの研究は生の分析のあり方を変容させ、心の学（die Wissenschaft von der Seele）の形成に向かう。心理学は普遍的な考察のなかで、人間の歩みと関係性に立ち返る必要がある。心理学は外部にある計り知れない世界を含みこんだ自己を獲得するものでなければならない。それは「人間学（Anthropologie）」となる。しかし、それはヘーゲルの絶対知とは違い、意識と内容が体験によってひとつとなった「動的人間学」である。これを著者は、「特有のダイナミズムから生じたひとつの形式的な人間学の理論」（S.95）と述べる。

「心理学的人間学（Psycho-Anthropologie）」は美学の成立といかにかかわるのか。芸術作品は自己を可視化すると同時に、人間全体の問題を可視化する。美は個人によって描かれるが、ひとつの哲学的本質を体現している。美学的反省は個人的な反省であるとともに世界全体の反省である。作品を創り出すとき主観は自己にたちかえる。しかしその反省には人間一般についての哲学的真理が語られている。ディルタイが長年にわたって考察した心理学、歴史学、そして美学の研究は、「反省」という観点から考えると、すべて一貫しているのが判明する。

経験を捉えるために芸術家は表現し反省する。反省は共有される。ここで著者が考える「反省」という言葉のもつスケールは、はかりしれないほど大きなものである。ひとつの芸術家の経験にあらゆる人間にとって共通なものが現われている。一人の芸術家が美を生産し、他者に伝えること自体があらゆる人間にとっての反省であり、そこに人間の哲学的本質を問うような意味や価値が現われている。作品を通して人間そのものの自己理解が行われる。

５．アイステーシスとノエシスの結節点

「III. 解決法」では、ここまでの論をふまえたうえで、「序論」で問題になっていたアイステーシスとノエシスの関係が整理し直され、著者なりの答えが用意される。「中立的な容器」であり、それ自体として意味や価値をもたない美は、いかにして芸術家以外の人間に遷移し意味を付与されるのか。「III. 解決法」の多くの頁はアイステーシスとノエシスが分離しないことの証明である。ここで、いかなる考え方で美が「transive（遷移的）」（S.9f.）なのかという本書の問いにひとつ

の答えが提示される。

ディルタイは、芸術が何らかの規定と結びつくことに慎重でなければならないと考える。詩人の経験を捉えたものは実効性のある、方法論的で、規則的な理念に高められなければならないが、その理念はさまざまなものが混じりあうなかで歴史的に統合されたものであり、それについて固定的に定義することをやめなければならない。著者は美の「transive（遷移性）」がなぜ必要であるかを考察するために、ディルタイとニーチェを比較する。

ニーチェもディルタイも形式のもつ安定性を排除し、多声音楽的なハーモニーを芸術家のなかで凝固させ、そのような動的な要因の取り出しを目指す。ディルタイにおけるニーチェとの分岐は、文化の理論の相対性と思弁的な空気の理論の相対性とが出会う点にある。ニーチェはヨーロッパの文化という長い寓話の運命が実行されることを観察した。偉大な様式に対する盲目さ、偉大な様式の不可能性は、ヨーロッパにおいて著述された思弁の間違った道の最後の一歩を表わしていると彼はみる。ゲーテやその時代の著述家の努力は長い没落の時代の始まりを示しており、同時代のむき出しの力をもつ群集によってその没落は決定づけられた。一方でディルタイは、ニーチェが否定する大衆こそが芸術作品の価値を高めることに寄与すると主張する。彼は個人が関与する特別な出来事よりも、文化の歴史が現実を産み出すと考える。体験された内容は大衆のなかで存続し、そこで体験された内容は一人の人間では率いることのできない変容の過程を現実化する。芸術作品は歴史の限界についての「見本（die Probe）」を指し示す。

ディルタイにおいて、ただ詩のためにだけ書かれるような詩は排される。つまり芸術至上主義（l'art pour l'art）は否定される。超越論的な主張は、自己と世界の関係のダイナミズムの領野のなかに入れ替えられる。芸術が形成されるのは人間同士の関係性においてである。芸術作品の価値はさまざまなものに遷移する歴史のなかで具現化される。

「III. 解決法」の三番目の節である「解釈学的誤解から離れて」という節では、ガダマーのディルタイ批判が取り上げられる。著者はガダマーのディルタイ批判を再批判することで、アイステーシスとノエシスの結節点を考察する。ガダマーはディルタイにおける生、歴史などの鍵概念に鈍感であり、ディルタイの体験と思考の概念を分離させたうえで、その体験の捉え方が固定的で生に内在するものを含んでいないと主張する。

ガダマーは意味を完全なる秩序のなかで産み出されるものと誤解している。一方で、ディルタイは象徴的なものと思慮深い反省とのあいだに横たわる弁証法をイメージしている。ガダマーは体験から生まれた芸術に二重性を見ており、彼のディルタイ解釈においてアイステーシスとノエシスは重ならない。確かに、芸術は芸術家自身の生々しい「体験（Erlebnis）」を表現している。一方でそれは概念によって解釈され、意味や価値を備えていく。しかし、ディルタイは体験と表現、理解を一体のものと捉えている。

> 経験が表象と概念の理想化する要素を土台にして構想されるのではなく、さまざまなイメージの多義的な進行（das vieldeutige Ablaufen der Bilder）によって構想されるという事実によって、概念の不十分さは積極的な意義を受け取る。示されるということはイメージ（das

Bild）というものに特有のものである。イメージは知性的ではない方法で、イメージの「アイステーシス」的な含意が認識されるところの契機のなかでのみ体験され、表現され、理解される。生に向かう反省はアイステーシスの批判的な復興を必然的にもたらし、反省はこの分節のなかで解釈にとって決定的な課題をつきつける。そのとき、意味の伝達は意味が理解される実際上の様態を無視することはないからである。（S.133）

芸術作品に存在論的な真理をあてはめようとする限り、美の次元の秩序化・理論化は芸術家自身の解釈に対抗して行われる（S.133）。美の解釈は「多元化する理解を反省する態度」（S.133）によってなされるべきである。複数の理解それぞれが比較されるべき対象である。美は「異質なものの混合（die heterogene Mischung）」（S.134）によって価値づけられる。

結語

本書では十分に説明されていない問題も幾つかある。本書の特徴は、心理学の対象を拡大することによって人間における他者理解と自己理解を必然化し、それによって美が解釈されていく行為を正当化する点にある。最後にガダマーのディルタイ批判が取り上げられたように、著者はガダマーのディルタイ批判を再批判することで、アイステーシスが解釈されていく可能性を論じ、「異質なものの混合（die heterogene Mischung）」によって発展していくものをディルタイの美学として提示している。「心理学（Psychologie）」という言葉と同様に「反省（Reflexion）」という言葉も著者独自の使用方法である。自己の内部で行っている反省は同時に自己の外へ向かう反省でもある。自己のなかで生産された作品は、つねにそれを観るものとともにあり、その二つがともに美学的反省と呼ばれる。本書では、ディルタイ解釈の明快な縮図が提示され、またそれに基づく独創的な考え方が展開されるあまり、「心理学（Psychologie）」、「反省（Reflexion）」という言葉のイメージは読者の考えるものとはかなりかけはなれたものとなっている。その不可解さは、ディルタイ自身の個人的な執着とも深くかかわっている。なぜ人間学的な次元で展開される彼の思想は、あえて「心理学（Psychologie）」として提示されたのだろうか。事実ディルタイはこのような心理学を発表したことで、当時の実験心理学者から強い批判を受けた。しかし著者は、心理学と人間学が融合することから新しい思想が結実することを示そうとしている。本書で著者は、そのようなディルタイの心理学の繊細な特徴を真正面から捉える。

本書は、美が個人にとどまらず人間全体の自己理解を可能にしていく必然性をあえて「心理学（Psychologie）」という言葉で考察する。ディルタイにおいてもマテウッチにおいても、その不可解さは残される。本書は芸術作品を通して「人間とは何か」という問いを意識化させ、人間の自己理解の問題を提起しようとした。「心理学（Psychologie）」という言葉が用いられるのはそれゆえであり、それが不可解だと感じられるのは読者イメージする「自己理解」の対象があまりにも狭いからであろう。

（いりえゆか　現代思想文化学・博士後期課程）